

Q1 口腔内灼熱症候群，舌痛症，非定型歯痛とはどのようなものですか

静岡市立清水病院口腔外科口腔顔面痛外来 井川雅子
Masako Ikawa

A 口腔内灼熱症候群と非定型歯痛は，口腔顔面部における代表的な特発性疼痛である。現在，国際頭痛分類第3版 beta 版 (ICHD-3 β)¹⁾ や日本口腔顔面痛学会²⁾³⁾ で用いられている名称，またそれらの旧称など，さまざまな用語が存在しているため，これらを表にまとめる。両者ともに患者の9割が女性であり，痛みは覚醒中ほぼ途切れることなく持続する。基本的に除外診断であるが，器質的異常がある疾患との大きな鑑別点は「食事中は痛みが改善する」点にある。このため食事に支障を来すことはまれである。

口腔内灼熱症候群 (Burning mouth syndrome ; BMS) / 舌痛症

器質的異常が認められないにもかかわらず，舌，頬粘膜，口蓋，歯肉などの広範囲の口腔粘膜に灼熱性疼痛を訴える疾患で，痛みは通常軽度～中等度であ

る。痛みが舌のみに限局しているものを特に「舌痛症 (glossodynia)」と呼称する。平均発症年齢は67歳⁴⁾。カンジダ症や扁平苔癬などの局所疾患，貧血などの全身性疾患で生じる，二次性舌痛症との鑑別が必要である¹⁾³⁾⁵⁾。

非定型歯痛

ICHD-3 β では非定型歯痛 (Atypical odontalgia ; AO) は，非定型顔面痛 (持続性特発性顔面痛 ; PIFP) のサブフォームとして位置づけられている¹⁾。平均発症年齢は55歳⁴⁾。歯科治療などをきっかけに，ある特定の歯に中等度～重度の持続性疼痛が発現する。痛みはいかなる歯科治療にも反応せず，最終的に患者に懇願される形で抜歯が行われてしまうことが多い。しかしながら抜歯をしても痛みは消失せず，神経支配を無視して他の歯に飛び火したり，顔面に拡大したりすることが多い⁶⁾⁷⁾。

病態生理

BMSの一部は末梢の神経障害性疼痛と考えられているが，BMSもAOも心理社会的要因が契機となって発症することが多いこと¹⁾や，患者の半数がうつ病などの精神疾患を有する⁸⁾との報告もあり，末梢の機序のみでは説明できないと考えられるようになっている。

表 現在用いられている用語

ICHD-3 β	旧称	日本口腔顔面痛学会
13.10 口腔内灼熱症候群 (BMS)	—	BMS
	—	舌痛症
13.11 持続性特発性顔面痛 (PIFP)	非定型顔面痛	特発性顔面痛
	非定型歯痛 (AO)	特発性歯痛

PIFP : Persistent idiopathic facial pain.

(文献 1-3 より作成)